

イチジクポット樹の低コスト型加温栽培の検討

～ハウス栽培により正品率も向上～

イチジクのポット樹において2月下旬から最低気温14℃で加温栽培を行うことによって、露地栽培よりも収穫時期が1ヶ月程度早まります。また、ハウス栽培によって正品率が向上し、高温による果実への障害はみられません。

1. 背景と目的

本県のイチジク栽培は、露地栽培が主体であり、6～7月の高価格時期の出荷は少ない現状です。加温栽培による早期出荷はこの問題を解決する手段ですが、現状では2月中旬から最低気温15℃～20℃で加温をする作型が多く、この場合燃油代が大きな負担となります。また、収穫期の高温による果実の障害も懸念されます。そこで、イチジクのポット樹の加温栽培において燃油を節減しながら収穫時期を早め、果実の障害のない栽培方法を検討しました。

2. 研究成果の概要

2月下旬からPOフィルムで二重被覆し、最低気温14℃で加温を行うハウス（低コスト型加温栽培）と露地で‘柘井ドーフィン’のポット樹をそれぞれ3樹ずつ管理し、果実の収穫時期と品質を調査しました。

加温を行うことによって、収穫時期が1ヶ月程度前進し、7月下旬から収穫が可能でした（表1）。なお、ハウス栽培では障害果の発生が少なく、露地栽培と比較して正品率が向上しました（図1、2）。また、ハウス栽培においても、被覆による高温が原因となる障害はみられませんでした。本県でのイチジクの慣行加温栽培では、

表1 収穫開始と燃油消費

	収穫開始日		燃油にかかる経費
	2018年	2019年	
低コスト型加温栽培	7月24日	7月30日	約70万円
露地栽培	8月19日	9月4日	—

注) 燃油にかかる経費は熱量換算と2017～19年単価から重油温風機による10aあたりで示した

燃油にかかる経費を試算すると、10aあたり約154万円（税別）であるのに対して、低コスト型加温栽培では約70万円（税別、重油に換算）であり、経費を約55%削減できます。



図1 ‘柘井ドーフィン’の主な障害果（規格外品）
左から傷果、裂果、汚損果

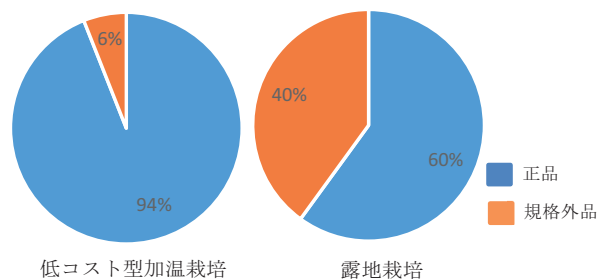


図2 障害果の割合（2019年）

3. 実用化に向けた対応

2月下旬から最低気温14℃で加温する低コスト型加温栽培は燃油費の改善につながり、露地よりも高単価が期待できます。しかし、実用化に向けては地植え樹では地温が上がりにくい点に注意し、出荷先と時期による単価差を考慮した現場ごとの経営試算が必要と考えられます。

（果樹・薬草研究センター 中村 剛士）

奈良県農業研究開発センター
ニュース No. 158

2020年6月30日発行

編集発行 奈良県農業研究開発センター
TEL 0744-47-4491(代)
FAX 0744-47-4851
URL <http://www.pref.nara.jp/1761.htm>
印刷 株式会社春日